

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド,
I, 3, 1—28

湯 田 豊

ここでは、わたくしはブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド I, 3, 1—28 までを文献学的に検討することにした。まず最初に原文を挙げ、それについて言語的な考察を加え、最後にサンスクリットのテキストの忠実な翻訳を試みた——

I, 3, 1—*dvayā ha prājāpatyā devās cāsurās ca | tataḥ kānīyasā eva devā jyāyasā asurās ta eṣu lokeṣv aspardhanta te ha devā ūcur hantāsurān yajña udgīthenātyayāmeti ||*

さて、*dvayā ha prājāpatyā devās cāsurās ca* という文句については、特に問題はない。この文句をわたくしは「神々と鬼神とはブラジャーパティ (=生類の主) の2種類の子孫であった」と訳した¹⁾。思想史的に見てわたくしの興味をそそるのは、神々と鬼神が同一の父から創造されたという事実である。神々と鬼神という二つのグループのなかで最初に生まれたものはどれか、という問題は、すでにブラーフマナ文献に現われている。年長者が父の遺産を継承する権利をもつという思想がそこには見られる。さて、われわれが今扱っているテキストにおいては、この問題はどのように扱われているであろうか？ われわれのテキストには次のように記されている——*tataḥ kānīyasā eva devā jyāyasā*, と。ここで注目に値するのは、*kānīyasā* と *jyāyasā* という二つの語形が対照的に使用されていることである。『パーニニ文法』, V, 3, 64 には *kanīyas*, V, 3, 61 には *jyāyas* の説明が見いだされる。パーニニ文法、およびその注釈「カーシカー」に拠る限り、*kanīyas* は「より若い」、「より数の少ない」という意味で使用されていることは明白である²⁾。ハンス・エルテルの編集したジャイミニヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ (III, 8, 1) によれば、

kanīyas は「より若い」という意味で使用されている。そこでは, kanīyān bhrāto 'vāca という文句が見いだされる。この文句の意味は, 「より若い兄弟は言った」ということである。Kanīyas は, ここでは年下を意味する。Kanīyas が年下を意味するとすれば, それと対照的な jyāyas が年上を意味することは明白である。パーニニ文法, およびカーシカーによれば, jyāyas は「より古い」, 「より数の多い」という意味である。ウパニシャッドにおいては, kanīyas は「より数が少ない」という意味でしばしば用いられている。例えば, プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド, I, 2, 5, およびチャンドーギヤ・ウパニシャッド, VII, 10, 1 などにおいては, kanīyas は数の少ないことを意味する。これに対して, jyāyas は「数の多い」ことを示唆する。Jyāyas は「より古い」というのが原義である。古代インドにおいては, 古いものは優れていると考えられていたから, 当然, jyāyas は「より優れた」ことを意味する。例えば, チャンドーギヤ・ウパニシャッド, II, 21, 3 には次のような詩句がある——yāni pañcadhā trīṇi trīṇi tebhyo na jyāyaḥ param anyad asti, と。この場合, jyāyaḥ は明らかに「より優れている」ことを意味する。そして, より優れていることは, 時として「より強い」ことも意味する。

さて, われわれは tataḥ kānīyasā eva devā jyāyasā asurāḥ というテキストに戻ろう。シャンカラの注釈によれば, 神々は数が少ない (alpa)。アーナンダギリの副注によれば, 鬼神は多数存在する。いずれにせよ, ここでは神々は数が少なく, 従って弱く, 鬼神たちは数が多く, 従って優れていた, と解釈することが出来るであろう。ベートリンクは tataḥ kānīyasā eva devā jyāyasā asurāḥ を Von diesen sind die Götter die jüngeren, die Dämonen die älteren と訳し, マクス・ミュラーも Now the Devas were indeed the younger, the Asuras the elder ones と訳した。スナールの訳は次の通りである——Les dieux étaient les cadets, les asuras les aînés. しかるに, ドイツセンはこれらの翻訳者とは異なった訳を試みた。問題の箇所を, ドイツセンは次のように訳した——Von ihnen waren die schwächeren die Götter, die stärker die Dämonen. ドイツセンの訳は決して間違いではないが, 忠実な訳とは言えない。わたくし自身はこの箇所を次のように訳した——「彼らのなかで神々は年下であり, 鬼神たちは年上であった」と。

Ta eṣu lokeṣv aspardhanta という文句は、文法的には特に問題はない。神々と鬼神たちの争いはブラーフマナ文献およびウパニシャッドに見いだされる。一般にブラーフマナ文献においては、神々は真理の代表者、鬼神は虚偽のシンボルとみなされている。そして、真理と虚偽の代表が宇宙的な規模で争うというのが、ここのテーマである。神々と鬼神たちが獲得しようとするのは、天・空・地の三界である（例えば、シャタパタ・ブラーフマナ, I, 9, 3, 11 参照）。このことを踏まえた上で、われわれは **ta eṣu lokeṣv aspardhanta** という文句を訳さなければならない——「彼らは、これらの世界を獲得しようとして争った」と。この文句の次に、**te ha devā ūcur hantāsūrān yajña udgīthenātyayāmeti** という文が来る。言語的にはここの箇所は容易に解説される。しかし、それは思想的には興味をそそる問題を含んでいる。ここの箇所を、わたくしは次のように訳した——「神々は言った。さあ、(ジョーティシュトーマという名の) 祭祀において、ウドギータを通じてわれわれは鬼神たちを征服しよう」と。ウドガートリ祭官によって歌われるウドギータは、サーマン (sāman) の吟唱である。神々と鬼神たちの争いにおいて決定的な役割を演じるのは「祭祀」である。ブラーフマナ文献においては、祭祀は勝利の手段とみなされている。神々は祭祀の成功によって天界を獲得し、鬼神たちは祭祀の失敗によって滅亡すると言われる。ここの箇所を理解する際にも、われわれはこのような背景を念頭に置く必要がある。神々とアスラがどのようにして争ったかについては、以下において述べよう。その前に、われわれはこのウパニシャッドの I, 3, 1 の訳をまとめよう——

I, 3, 1 (訳)——神々と鬼神はブラジャーパティの2種類の子孫であった。彼らのなかで神々は年下であり、鬼神たちは年上であった。彼らは、これらの世界を獲得しようとして争った。神々は言った。さあ、(ジョーティシュトーマという名の) 祭祀において、ウドギータを通じてわれわれは鬼神たちを征服しよう。

I, 3, 2——**te ha vācam ūcus tvam na udgāyati tatheti tebhyo vāg udagāyat | yo vāci bhogas tam devebhya āgāyad yat kalyāṇam vadati tad ātmane | te vidur anena vai na udgātrātyeṣyantīti tam**

abhidrutya pāpmanāvidhyansa yaḥ sa pāpmā yad evedam aprati-
rūpaṃ vadati sa eva sa pāpmā ||

神々と鬼神たちは、三界を獲得しようとして争い、神々はウドギータによって鬼神たちを征服しようとする。神々はまず最初に「ことば」、すなわち、「発声器官」に対して次のように言った——*te ha vācam ūcus tvam na udgāyeti*, と。*Udgāya* は、「吟唱し始めよ」という意味であるが、ここでは *udgītha* を歌え、ということを含蓄している。シャンカラも、その注釈において *udgāyau dgātraṃ karma kuruṣva* と述べている。シャンカラによれば、*udgāya* は「ウドガートリ祭官の職務を果たせ」ということを意味する。神々は「ことば」に対してウドギータを歌え、と言ったのである。これに対して、*tatheti tebhyo vāg udagāyat* という文句が続く。*Tatheiti* というのは、同意ないし承諾をあらわす文句である。‘Yes’, said とミュラーは訳している。ドイッセンは „So sei es“, スナールは *Soit, dit-elle* と訳した。ペートルリンクは *tatheti* が同意を意味することを強調して *Die Stimme willigte ein* と独訳した。この文句に関して、ヨーロッパの三大インド学者は同じ解釈をしている。*Tebhyo vāg udagāyat*——この文句の意味は明瞭である。「ことばは、彼らのためにウドギータを歌った」——このように訳している。*Te ha vācam ūcus tvam na udgāyeti tatheti tebhyo vāg udagāyat*——「彼らはことばに対して言った、お前はわれわれのためにウドギータを歌え、と。よろしい、と言って、ことばは彼らのためにウドギータを歌った」。

われわれは、次のテキストへ急がねばならない。次の文句は、次の通りである——*yo vāci bhogas taṃ devebhya āgāyad yat kalyāṇaṃ vadati tad ātmane*. まず最初に、われわれは前半を検討しよう。*Yo vāci bhogas taṃ devebhyo āgāyad* という文句のなかで特に注目に値するのは *bhoga* である³⁾。リグ・ヴェーダ、X, 34, 3 には次のような文句が見いだされる——*āsvasyeva jārato vāsnyasya nāhāṃ vindāmi kitavāsya bhōgaṃ*. わたくしはこの文句を次のように訳す——「年老いて売りに出ている馬のように、わたしは賭博者には効用を見いださない」と。リグ・ヴェーダのこの箇所においては、*bhoga* は効用を意味する。タイッティリーヤ・ブラーフマナ、II, 3, 10, 3 には次のような文句がある——*tasmād*

u ha striyo *bhogam* aiva hārayante. ここで用いられている *bhoga* もやはり効用を意味する。Yo vāci *bhogas taṃ devebhyo āgāyad* を、わたくしは次のように訳した——「それ (=ことば) は、歌うことによって、ことばのなかにある効用を神々のために獲得した」と。ことばは、神々がことばの効用を獲得するように歌ったのである。われわれは、今や後半の文句を検討しなければならない。Yat *kalyānaṃ vadati tad ātmane* というのが問題のテキストである。シャンカラは、この箇所に対して *yat kalyānaṃ śobhanaṃ vadati varṇān abhinirvartayati tad ātmane mahyam eva* と注釈している。シャンカラの注釈によって問題の箇所を訳せば、次のようになるであろう——「人が語る美しいものを、自己のために」と。ここで使用されているアートマン (*ātman*) は決して形而上学的な原理、あるいは究極的実在ではない。それは自己、あるいは自己自身を意味するにすぎない。ことばは、歌うことによって神々のためにことばのなかにある効用を獲得したけれども、ことばの機能そのものから得られる結果を、ことばは自己のために取って置いたのである。シャンカラは、*ātmane* を *mahyam eva* と注釈している。*Mahyam* は *aham* (わたくし) という代名詞の与格であるから、わたくしのために、と訳してよいであろう。

さて、われわれは次のテキストの文句を検討しよう——*te vidur anena vai na udgātrā 'tyeṣyantīti*. インド版では *te vidur* となっているが、ベートリンクはこれを *te 'vidur* と訂正した。スナールも、ベートリンクと同じく、*te 'vidur* とテキストの校訂をしている。Vid (II p) の3人称複数の完了形は *vidur* であり、これに対応する過去形は *avidur* である。内容的には、ベートリンクが推量したように、*avidur* と訂正した方が自然である。もちろん、この *te* は鬼神たちのことを指す。わたくしは、*te vidur anena vai na udgātrātyeṣyantīti* という文句を次のように訳した——「彼ら (=鬼神たち) は知っていた、実に、彼ら (=神々) はこのウドギータの歌い手によって、われわれを征服するであろう」と。ここでウドギータの歌い手 (=ウドガートリ祭官) というのは、ことば自身のことである。

Tam abhidrutya pāpmanāvidhyan——「彼らはその歌い手を襲い、悪によって貫いた」と。われわれは最後の文句を挙げよう——*yaḥ sa pāpmā*

yad evedam apratirūpaṃ vadati sa eva sa pāpmā. この文章で問題になるのは, apratirūpaṃ であろう。Apratirūpaṃ という語は, プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド, II, 1, 8 にも見いだされる。シャタパタ・ブラーフマナ, III, 2, 1, 5 には pratirūpaṃ という語形が使用されている——yad pratirūpaṃ tac chilpam. この文章は, 「実に, 芸術作品は相応している」と訳してよいであろう。A-pratirūpa は相応しない, 適合しない, 不適當である, などと訳することが出来る。「それがここで不適當なことを語るといふ悪——それが悪にほかならない」——これが yaḥ sa pāpmā yad evedam apratirūpaṃ vadati sa eva sa pāpmā の意味である。以上の言語的な検討に基づき, I, 3, 2 のテキストの翻訳をまとめよう——

I, 3, 2 (訳)——彼ら (=神々) は, ことばに対して言った, お前はわれわれのためにウドギータを歌え, と。「よろしい」と言って, ことばは彼らのためにウドギータを歌った。それは歌うことによって, ことばのなかにある効用を神々のために獲得した。人が語る美しいものを, それは自己のために (取って置いた)。彼ら (=鬼神たち) は知っていた, 実に, 彼らはこのウドギータの歌い手によって, われわれを征服するであろう, と。彼らはその歌い手を襲い, 悪によって貫いた。それ (=ことば) がここで不適當なことを語るといふ悪——それが悪にほかならない。

I, 3, 3——atha ha prāṇam ūcus tvaṃ na udgāyeti tatheti tebhyaḥ prāṇa udagāyad yaḥ prāṇe bhogas taṃ devebhya āgāyad yad kalyāṇaṃ jighrati tad ātmane | te vidur anena vai na udgātrā-tyeṣyantīti tam abhidrutya pāpmanāvidhyan sa yaḥ sa pāpmā yad evedam apratirūpaṃ jighrati sa eva sa pāpmā ||

I, 3, 3 (訳)——それから, 彼らは息に対して言った, お前はわれわれのためにウドギータを歌え, と。「よろしい」と言って, 息は彼らのためにウドギータを歌った。それは歌うことによって, 息のなかにある効用を神々のために獲得した。人が嗅ぐ美しいものを, それは自己のため

に（取って置いた）。彼ら（＝鬼神たち）は知っていた、実に、彼らはこのウドギータの歌い手によって、われわれを征服するであろう、と。彼らはその歌い手を襲い、悪によって貫いた。それがここで不適當なものを嗅ぐという悪——それが悪にほかならない。

I, 3, 4—atha ha cakṣur ūcus tvam na udgāyeti tatheti tebhyaś cakṣur udāgāyat | yaś cakṣuṣi bhogas taṃ devebhya āgāyad yat kalyāṇaṃ paśyati tad ātmane | te vidur anena vai na udgātrā-tyeṣyantīti tam abhidrutya pāpmanāvidhyan sa yaḥ sa pāpmā yad evedam apratirūpaṃ paśyati sa eva sa pāpmā ||

I, 3, 4 (訳)——それから、彼らは眼に対して言った、お前はわれわれのためにウドギータを歌え、と。「よろしい」と言って、眼は彼らのためにウドギータを歌った。それは歌うことによって、眼のなかにある効用を神々のために獲得した。人が見る美しいものを、それは自己のために（取って置いた）。彼ら（＝鬼神たち）は知っていた、実に、彼らはこのウドギータの歌い手によって、われわれを征服するであろう、と。彼らはその歌い手を襲い、悪によって貫いた。それがここで不適當なものを見るという悪——それが悪にほかならない。

I, 3, 5—atha ha śrotram ūcus tvam na udgāyeti tatheti tebhyaḥ śrotram udagāyad yaḥ śrotre bhogas taṃ devebhyaḥ āgāyad yat kalyāṇaṃ śṛṇoti tad ātmane | taṃ vidur anena vai na udgātrā-tyeṣyantīti tam abhidrutya pāpmanāvidhyan sa yaḥ pāpmā yad evedam apratirūpaṃ śṛṇoti sa eva sa pāpmā ||

I, 3, 5 (訳)——それから、彼らは耳に対して言った、お前はわれわれのためにウドギータを歌え、と。「よろしい」と言って、耳は彼らのためにウドギータを歌った。それは歌うことによって、耳のなかにある効用を神々のために獲得した。人が聞く美しいものを、それは自己のために（取って置いた）。彼ら（＝鬼神たち）は知っていた、実に、彼らはこのウドギータの歌い手によって、われわれを征服するであろう、と。

彼らはその歌い手を襲い、悪によって貫いた。それがここで不適當なものを聞くという悪——それが悪にほかならない。

I, 3, 6—atha ha mana ūcus tvam na udgāyeti tatheti tebhyo mana udagāyad yo manasi bhogas tam devebhya āgāyad yat kalyāṇam saṅkalpayati tad ātmane | te vidur anena vai udgātrā-tyeṣyantīti tam abhidrutya pāpmanāvidhyan sa yaḥ pāpmā yad evedam apratirūpaṁ saṅkalpayati sa eva sa pāpmaivam u khalv etā devatāḥ pāpmabhir upāsṛjann evam enāḥ pāpmanā 'vidhyan ||

I, 3, 6 (訳)——それから、彼らは心（＝思考器官）に対して言った、お前はわれわれのためにウドギータを歌え、と。「よろしい」と言って、心は彼らのためにウドギータを歌った。それは歌うことによって、心のなかにある効用を神々のために獲得した。人が思考する美しいものを、それは自己のために（取って置いた）。彼ら（＝鬼神たち）は知っていた、実に、彼らはこのウドギータの歌い手によって、われわれを征服するであろう、と。彼らはその歌い手を襲い、悪によって貫いた。それがここで不適當なものを考えるという悪——それが悪にほかならない。まことに、このように彼ら（＝鬼神たち）はこれらの神格（ことば・息・眼・耳・心）を悩ませ、このように彼らを悪によって貫いた。

I, 3, 7—atha hemam āsanyam prāṇam ūcus tvam na udgāyeti tatheti tebhya eṣa prāṇa udagāyat te vidur anena vai na udgātrā-tyeṣyantīti tad abhidrutya pāpmanāvivyatsan sa yathāśmānam rtvā loṣṭo vidhvamsetaivam haiva vidhvamsamānā viṣvañco vineśus tato devā abhavan parā 'surā bhavaty ātmanā parā 'sya dviṣan bhrātr̥vyo bhavati ya evaṁ veda ||

まず最初に、atha hemam āsanyam prāṇam ūcus tvam na udgāyeti という文句を検討しよう。I, 3, 3 において、われわれは atha ha *prāṇam ūcus* という文句に出会った。この場合の *prāṇa* は鼻の息である。チャンドーギヤ・ウパニシャッド、I, 2, 2 においては *te ha nāsikyam prāṇam*

udgītham upāsaṃ cakrire という文句がある。この nāsikya prāṇa が、この箇所で使用されている prāṇa と同一である。しかし、prāṇa は鬼神たちに襲われ、悪によって貫かれた⁴⁾。そこで、われわれは今や、この鼻の息とは異なった息に出会う。それが āsanya prāṇa である。Āsanya は āsan (口) の派生語である。それは、「口のなかの息」を指す。チャーンドーギヤ・ウパニシャッド, I, 2, 7 においては、āsanya prāṇa の代わりに mukhya prāṇa という語が見いだされる。Mukhya は mukha (口) の派生語であり、āsanya prāṇa の同義語である。ことば (発声器官)、息 (嗅覚)、眼 (視覚)、耳 (聴覚)、および心 (思考器官) という人間の五つの感覚器官ないし機能が悪に貫かれ、悪からの解放が不可能になった今、「口のなかの息」が神々の頼みの綱になる。Atha hemam āsanyaṃ prāṇam ūcus tvam na udgāyati—「それから、彼ら (= 神々) はこの口のなかの息 (= 口中の生气) に対して言った、お前はわれわれのためにウドギータを歌え、と」。

Tatheti tebhya eṣa prāṇa udagāyat te vidur anena vai na udgātrātyeṣyantīti—この文句に関しては、特に問題はない。しかし、その次の文句は、前のテキストとは違う。われわれは、ここで次のような文句を見いだす—tad abhidrutya pāpmanāvivyatsan sa yathāsmānam ṛtvā loṣṭo vidhvaṃsetaivaṃ haiva vidhvaṃsamānā viṣvañco vineśuḥ. Avivyatsat は viyadh の desiderative (vivyatsati) の parasmaipada の過去形である。文法的には、特に問題はない。Āsmānām ṛtvā は、「石に達して」という意味である。シャンカラの注釈によれば、ṛtvā は「到達して」と解釈することが出来る。チャーンドーギヤ・ウパニシャッド, I, 2, 7—8 においては、われわれは āsmānam という語の代わりに āsmānam ākhaṇam という形を見いだす。ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ, I, 60, 7 にも、āsmānam ākhaṇam ṛtvā という形が見いだされる。この箇所を、わたくしは次のように訳した—「それを襲って、彼ら (= 鬼神たち) は悪によって貫こうとした。しかし、石に達して土塊が砕け散るように、このようにすべての方角に砕け散りながら彼らは消滅した」⁵⁾、と。

Tato devā abhavan parā 'surā bhavaty ātmanā parā 'sya dviṣan bhrātrvyo bhavati ya evaṃ veda. ここで注目しなければならないの

は、abhavan と parā という対応であろう。Parā という語は、もちろん、parābhavan という形を予想させる。Tato devā abhavan parā 'surā を、スナールは *Ainsi les dieux furent; les asuras périrent.* と訳している。もちろん、彼のこの翻訳は正しい。しかし、abhavan と parābhavan の対応を認めれば、両者を繁栄と破滅として理解することも出来る。わたくしは tato devā abhavan parā 'surā を、「それゆえ、神々は存続し、鬼神たちは破滅した」と訳した。さて、bhavaty ātmanā parā 'sya dviṣan bhrātrvyo bhavati ya evaṃ veda という形を簡単に検討しよう。この文句のなかで、特にわたくしの興味をそそるのは、ātmanā という表現である。シャンカラはこの語を *prajāpati-svarūpeṇa* と注釈しているが、ここの箇所のアートマンは形而上学的な原理とは何のかかわりもない。タイッティリーヤ・サンヒター、II, 4, 3, 3 には、bhavaty ātmanā parā 'sya bhrātrvyo bhavati という形が見いだされる。キース (Keith) は、この箇所を *he prospers with himself, his foe is defeated* と英訳した。いずれにせよ、bhavaty ātmanā を、われわれは「自己自身によって存続する」と訳してよいであろう。もしもこのように訳すことが可能であるとすれば、parā 'sya bhrātrvyo bhavati は「彼を憎んでいる敵はおのずから (= 自己自身によって) 破滅する」と訳さなければならないであろう。スナールは bhavaty ātmanā を *conserve l'être*, ベートリンクは *bekommt für seine Person die Oberhand* と訳している。しかしながら、わたくしは bhavaty ātmanā というテキストにおける ātman は実質的には *āsanya prāṇa* を意味するのではないかと以前から考えている。神々と鬼神たちの争いにおいて、ことば、息、眼、耳、および心は神々のためにウドギータを歌ったが、それらの器官の機能は鬼神たちに襲われ、悪によって貫かれてしまった。しかし、口のなかの息は悪によって貫かれず、逆に鬼神たちはそれに達してすべての方角に砕け散って消滅してしまった。神々は口のなかの息によって存続し、鬼神たちはそれによって消滅した。もちろん、当該の箇所で使用されているアートマンは「口のなかの息」を明示はしない。従って、わたくしの推量は明瞭な証拠に基づいているわけではない。わたくしはただこの箇所のアートマンが口のなかの息をかすかに示唆するのではないかと思っているだけである。しかし、以下の原典を注意深く読めば、アートマンと口のなかの息が同義語であるこ

とが明らかになるであろう⁶⁾。

I, 3, 7 (訳)——それから、この口のなかの息は言った、お前はわれわれのためにウドギータを歌え、と。「よろしい」と言って、この息は彼らのためにウドギータを歌った。彼ら（鬼神たち）は知っていた、実に、彼らはこのウドギータの歌い手によって、われわれを征服するであろう、と。彼らはその歌い手を襲い、悪によって貫こうとした。しかし、土塊が石に達して砕け散るように、このように彼らはすべての方角に砕け散りながら消滅した。それゆえ、神々は存続し、鬼神たちは破滅した。このように知っている人はアートマン（＝口のなかの息）によって存続し、その人を憎んでいる敵は破滅する。

I, 3, 8——te hocuḥ kva nu so 'bhūd yo na ittham asaktety ayam āsye 'ntar iti so 'yāsya āngirasō 'ngānām hi rasaḥ ||

ここの箇所において、「口のなかの息」に関する語源解釈が試みられている。ウパニシャッドの語源解釈は言語学的には何の価値もないけれども、古代インド人の思考方法を知る上では有益であろう。

I, 3, 8 (訳)——彼ら（＝神々）は言った、さて、このようにしてわれわれに付着したものは、一体、どうなったのか？、と。口のなかにあるから、これはアヤスヤ (ayāsya) である。それはアーンギラサ (āngi-rasa) である。なぜなら、それは四肢 (aṅga) の精気 (rasa) であるから。

I, 3, 9——sā vā eṣā devatā dūr nāma dūraṃ hy asyā mṛtyur dūraṃ ha vā asmān mṛtyur bhavati ya evaṃ veda ||

ジャイミニヤー・ウパニシャッド・ブラーフマナ, II, 1, 2 によれば、悪 (pāpman) と死 (死) が並置されている。鬼神が五つの感覚器官の機能を襲い、それらを悪によって貫いたことは、すでに述べた通りである。ここの箇所において鬼神たちが五つの心理的な器官に付着した「悪」は、

死にほかならない。死からの解放が、われわれのウパニシャッドの I, 3, 9 以下の主要テーマである。言語（発声器官）、嗅覚、視覚、聴覚、および心（思考器官）の5つの機能は死としての悪によって貫かれた。つまり、死はそれらの機能に付着したのである。しかし、口のなかの息はすべての悪から解放されている。ここでは、死としての悪を避けるものとしての「口のなかの息」が素朴な形で扱われている。

I, 3, 9 (訳)——実に、この神格（＝口のなかの息）はドゥール（dūr）と呼ばれる。なぜなら、死はそれ（口のなかの息）から隔っている（dūr）から。実に、死はこのように知っている人から隔たっている。

I, 3, 10——*sā vā eṣā devataitāsāṃ devatānaṃ pāpmānaṃ mṛtyum apahatya yatrāsāṃ diśāṃ antas tad gamayāñ cakāra tad āsāṃ pāpmano vinyadadhāt tasmān na janam iyān nāntam iyān net pāpmānaṃ mṛtyum anvavāyānīti ||*

Sā vā eṣā devatā という際、われわれはこの神格が「口のなかの息」を指すことを知っている。*Etāsāṃ devatānāṃ pāpmānaṃ mṛtyum apahatya* という文句においても、*devatā* という女性名詞の複数形の属格が使用されている。この場合の「神格」は「ことば」や「息」などの感覚器官の各機能を意味する。この箇所では、*pāpman* と *mṛtyu* は同格であり、スナールはこの文句を仏教の *Mṛtyu-pāpman* と比較している。ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ、II, 1, 2 において、われわれは……*apahatya mṛtyum apahatya pāpmānaṃ* という形を見いだす。*Sā vā eṣā devataitāsāṃ devatānāṃ pāpmānaṃ mṛtyum apahatya* を、わたくしは次のように訳した——「実に、この神格（＝口のなかの息）はこれらの神格（ことばなど）の悪である死を撃退してから」と。悪と死が同格とみなされている事実、われわれは読者の注意を喚起したい。

さて、われわれは次の文句を検討しなければならない——*yatrāsāṃ diśāṃ antas tad gamayāñ cakāra*。まず最初に、われわれは *yatra-tad* という対応に注意しなければならない。シャタパタ・ブラーフマナ、XIII, 8, 4, 5 には次のような文句がある——*yatrodakam bhavati tat snānti*。

この文句を、わたくしは「水のあるところで、人々は沐浴する」と訳す。シャタパタ・ブラーフマナのこの箇所と同じく、われわれのウパニシャッドのこの箇所においても、*yatra—tad* は *dorthin—wo* と訳している。シャンカラは *gamayāñ cakāra* を *gamanam kṛtavān* と注釈している。シャンカラの注釈によれば、口のなかの息は「これらの方角の果てるところに行った」と訳すことが出来る。そして、この解釈はサンスクリット文法の用法と合致する。マクドーネルの *A Sanskrit Grammar for Students* (p. 116) によれば、*gamayāñ cakāra* は 'he did going', i.e. 'he did go' と訳すことが出来る。しかるに、マクス・ミュラーはこれを *sent it*, ドイッセンは *versetzte*, スナールは *relégua* と訳している。これらの諸家は、*gamayāñ cakāra* を「行った」とは訳さずに「行かせた」と理解しているように思われる。ベートルングの訳は、この点極めて明快である。彼は *hiess……gehen* と訳している。ベートルングが *gamayāñ cakāra* を「行かせた」と解釈していることは明らかである。しかも、ランガラーマースジャの注釈によれば、*gamayāñ cakāra* は *dūrnāmatvād dūram mṛtyum nināyety* と解釈されている。もしもこの注釈に忠実であろうとすれば、われわれは「ドゥールと称せられるのだから、それ (=口のなかの息) は死を遠くへ (隔たって) 連れて行った」と理解することが出来る。しかも、シャンカラは *gamayāñ cakāra* について *gamanam kṛtvān* という注釈を施したにもかかわらず、*tat tatra gamayitvā 'sām devatānām pāpmana* と述べている。シャンカラもまた、口のなかの息が「これらの方角の神格 (=ことばなど) の悪をそこ (これらの方角の果てるところ) に連れて行って」と解釈している。文法的にはともかく、前後の脈絡から判断すれば、*gamayāñ cakāra* を「行かせた」、あるいは「連れて行った」、「運んだ」、と訳すのは決して不自然ではない。

Tad āsām pāpmano vinyadadhāt tasmān na janam iyān nāntam iyān net pāpmanam mṛtyum anvavāyānīti という文句について簡単な説明を加えよう。冒頭の *tad* という語は *yatra* に対応する語であり、これらの方角の果てるところ、すなわち、「そこに」というくらいの意味である。*Vi-ni-dhā* については、特に問題はない。「下に置く」、「置く」、あるいは「下ろす」という意味でここでは使用されている。*Anv-ave* を、わたくしは「近づく」と解釈する。スナールは *anv-ave* を *rejoindre* と

訳している。

I, 3, 10 (訳)——実に、この神格(=口のなかの息・生气)は、これらの神格(=ことばなどの心理的器官)の悪である死を撃退してから、これらの方角の果てるところに、(ことばなどの神格の悪を連れて)行ったのである。それは、これらの神格の悪をそこに置いた。それゆえ、われわれは悪である死に近づかないように、とこのように恐れて、人は辺郷の民の許に行くべきではない、人は辺境の地に行くべきではない。

I, 3, 11——*sā vā eṣā devataitāsāṃ devatānām pāpmānaṃ mṛtyum apahatyāthainā mṛtyum atyavahat ||*

シャンカラは、*atyavahat* に関して、*atītyāvahat* と注釈している。死を超えて運んだという意味である。ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ、III, 9, 10 において、*yas trayāṇām mṛtyūnām sāmṇā 'tivāhaṃ veda sa udgātā mṛtyum ativahatīti* という文句が見いだされるが、このテキストにおける *ati-vaḥ* の形も同じである。*Mṛtyum ativahati* を、われわれは「死を超えて運ぶ」と訳して差支えない。

I, 3, 11 (訳)——実に、この神格(=口のなかの息・生气)は、これらの神格(=ことばなど)の悪である死を撃退してから、その直後に死を超えてこれらを運んだ。

I, 3, 12——*sa vai vācam eva prathamām atyavahat sā yadā mṛtyum atyamucyata so 'gnir abhavat so 'yam agniḥ pareṇa mṛtyum atikrānto dīpyate ||*

Sa vai vācam eva prathamām atyavahat——この文句を、わたくしは「実に、それ(=口のなかの息)は最初にことばを(死を)超えて運んだ」と訳した。*Sā yadā mṛtyum atyamucyata so 'gnir abhavat* という文句は、シャタパタ・ブラーフマナ、II, 3, 3, 9 をわれわれに連想させる。ここの箇所の意味は、次の通りである——「それ(ことば)

が死から解放された時、それは火になった」と。ここで、われわれは「ことば」と「火」の対応関係を認めることが出来る。So 'yam agniḥ pareṇa mṛtyum atikrānto dīpyate という文句を、ランガラーマヌジャは次のように解釈している——*evam mṛtyum atikrānto 'gnir niras-tapāparūpamalatayā mṛtyum pareṇa mṛtyoḥ parastād adīpyata ity arthaḥ*, と。もちろん、この注釈はシャンカラに基づいている。シャンカラ自身の注釈は、より簡明である。彼は *so 'yam atikrānto 'gniḥ pareṇa mṛtyum parastān mṛtyor dīpyate* と述べている。この箇所のテキストを、わたくしは次のように訳した——「死を超えているので、この火は死のかなたに輝く」と。死を超えることがウパニシャッドの中心思想である——このことは、以下の繰り返しにおいて強調される。

I, 3, 12 (訳)——実に、それ (=口のなかの息) は最初にことばを (死を) 超えて運んだ。それ (=ことば) が死から解放された時、それは火になった。死を超えているので、死のかなたで、この火は輝く。

I, 3, 13——*atha prāṇam atyavahat sa yadā mṛtyum atyamucyata sa vāyum abhavat so 'yaṃ vāyuḥ pareṇa mṛtyum atikrāntaḥ pavate* ||

I, 3, 13 (訳)——それから、それ (=口のなかの息) は息を (死を超えて) 運んだ。それ (=息) が死から解放された時、それは風になった。死を超えているので、死のかなたで、この風は吹く。

I, 3, 14——*atha cakṣur atyavahat tad yadā mṛtyum atyamucyata sa ādityo 'bhavat so 'sāv ādityaḥ pareṇa mṛtyum atikrāntas tapati* ||

I, 3, 14 (訳)——それから、それ (=口のなかの息) は眼を (死を超えて) 運んだ。それ (=眼) が死から解放された時、それは、太陽になった。死を超えているので、死のかなたで、かの太陽は熱する。

I, 3, 15—atha śrotram atyavahat tad yadā mṛtyum atyamucyata diśo bhavaṃs tā imā diśaḥ pareṇa mṛtyum atikrāntāḥ ||

I, 3, 15 (訳)——それから、それ (=口のなかの息) は耳を (死を超えて) 運んだ。それ (=耳) が死から解放された時、それは方角になった。死を超えているので、これらの方角は死のかなたにある。

I, 3, 16—atha mano 'tyavahat tad yadā mṛtyum atyamucyata sa candramā abhavat so 'sau candrāḥ pareṇa mṛtyum atikrānto bhāty evaṃ ha vā enam eṣā devatā mṛtyum ativahati ya evaṃ veda ||

I, 3, 16 (訳)——それから、それ (=口のなかの息) は心を (死を超えて) 運んだ。それ (=心) が死から解放された時、それは月になった。死を超えているので、死のかなたで、かの月は照る。このように知っているこの人を、実に、この神格 (=口のなかの息) は、このようにして死から解放する。

I, 3, 17—athātmane 'nnādyam āgāyad yad dhi kiñ cānnaṃ adyate 'nenaiva tad adyata iha pratitiṣṭhati ||

I, 3, 17 (訳)——それから、それ (=口のなかの息) は歌うことによって自己のために食物を獲得した。なぜなら、およそ食べられる食物は何であれ、まさにそれによって食べられるから。それ (=口のなかの息) は、ここに (=食物に) 根拠をもっている。

I, 3, 18—te devā abruvann etāvad vā idaṃ sarvaṃ yad annaṃ tad ātmana āgāsīr anu no 'sminn anna ābhajasveti te vai mābhis-amviśateti tatheti taṃ samantaṃ pariṇyaviśanta | tasmād yad anenānnaṃ atti tenaitās tṛpyanty evaṃ ha vā enam svā abhis-amviśanti bhartā svānām śreṣṭhaḥ pura etā bhavaty annādo 'dhipatir ya evaṃ veda ya u haivaṃvidam sveṣu pratipratir bub-

hūṣati na haivālaṃ bhāryebhyo bhavaty atha ya evaitam anubhavati yo vaitam anu bhāryān bubhūrṣati sa haivālaṃ bhāryebhyo bhavati ||

まず最初に、われわれは *te devā abruvann etāvad vā idaṃ sarvaṃ yad annaṃ tad ātmana āgāsīr* という文章を翻訳しよう。Te devā abruvann——彼ら神々は語った。神々の語った内容は次の通りである——*etāvad vā idaṃ sarvaṃ yad annaṃ tad ātmana āgāsīr*. この文句を、わたくしは次のように訳した——実に、およそ食物であるこのすべてをこれだけ、お前は歌うことによって自己のために獲得した、と。さらに続けて、神々は次のように言った——*anu no 'sminn anna ābhajasveti*, と。Anv-ā-bhaj は、この場合には、口のなかの息の次に、あるいはそれとともに分け前を受けさせることを意味する。シャンカラは、*anu* を *paścāt* と解釈し、*anu no 'sminn anna ābhajasva* を *no 'smān asminn anna ātmārthe tavān na abhajasvābhājayasva* と注釈している。シャンカラは引き続き *asmāṃś cānabhāgīnaḥ kuru* と述べている。わたくしは、シャンカラのように *anu* を *paścāt* (……の後に) と解釈せず、ドイッセンとともに *mit* と解釈した。当該の箇所に関して、わたくしは次のように翻訳した——「(お前＝口のなかの息) とともに、われわれを (お前の) この食物に関与せしめよ!」, と。リグ・ヴェーダ, IV, 32, 21 には当該の箇所と酷似している文句が見いだされる——*ā no bhajasva rādhasi*.

神々のこの要請に対して、口のなかの息は次のように答える——*te vai mā 'bhisamviśateti*, と。ここで用いられている *te* は *tad* の男性形複数の主格であり、「彼らは」という意味である。しかし、この場合にはそうは訳せない。口のなかの息が神々に向かって発言する際には、*te* は「あなたたち」でなければならない。そこで、シャンカラは *te yūyaṃ yady annārthino* と注釈した。シャンカラは、*te* を人称代名詞複数の主格 *yūyam* (あなたたち) と解釈した。そして、彼は *abhisamviśata* を *niviśate* と注釈した。Abhisamviś という語は「……のなかに入る」と解釈することが出来る。例えば、タイッティリーヤ・ブラーフマナ, II, 7, 16, 3 には *māṃ gopatim abhisamviśantu* という形が見られるが、この場合の *abhisamviśantu* は「入れ!」という意味である。チャンドーギヤ・

ウパニシャッド, I, 11, 5 の *ha vā imāni bhūtāni prāṇam evābhisamviśanti* という文句においては, *abhisamviś* は「入る」ことを意味する。それゆえ, マクス・ミュラーは *te vai mābhisamviśata* を *You there, enter into me*, ドイッセンは *so gehet alle in mich ein!*, スナールは *Pénétrez donc en moi* と訳した。しかるに, ベートリンクは *Vereinigt euch um mich* と訳した。しかし, ベートリンクの訳は *abhisamviś* の原義に近いと言えるかもしれない。*Te vai mābhisamviśate* を「実に, あなたたちはわたしと向い合って坐れ!」と訳することも可能である。われわれのウパニシャッドにおいて, *te vai mābhisamviśata* に続く文句として, *evaṃ ha vā enaṃ svā abhisamviśanti* という形をわれわれは知っている。この場合には, *abhisamviś* を「入る」と訳すことにはわたくしは抵抗を感じる。マクス・ミュラー, およびスナールは, この場合 *abhisamviś* を字義通りには訳していない。しかるに, ドイッセンは「入る」と文字通りに訳している。*Te vai mābhisamviśate* における *abhisamviś* を「入る」と訳せば, 当然, *evaṃ ha vā enaṃ svā abhisamviśanti* における *abhisamviś* も「入る」と訳すべきであろう。もしもドイッセンの訳を拒否すれば, われわれはベートリンクの訳を採用すべきであろう。ベートリンクは, *evaṃ ha vā enaṃ svā abhisamviśanti* を, *um den vereinigen sich in gleicher Weise die Seinigen* と訳している。ある人の一族がその人のなかに入ることは不可能であるから, 一族の人々が彼のまわりに集まると解釈する方が自然であろう。

Abhisamviś の訳を決定する前に, われわれは *tatheti taṃ samantaṃ pariṇyaviśanta* という文句を検討しなければならない。ベートリンク流に考えれば, *pariṇy-viś* は「……のまわりに坐る」という意味である。シャタパタ・ブラーフマナ, XIV, 1, 1, 7 の文句——*taṃ devā anabhidrṣṇuvantaḥ samantaṃ pariṇyaviśanta*——は, われわれにベートリンクの訳が正しいことを示唆する。この場合には, *pariṇy-viś* は「……のまわりに坐る」ことを意味すると解釈されるからである。しかし, ドイッセン流に解釈すれば, *pariṇy-viś* をわれわれは「入る」と訳すことが出来る。わたくし自身はベートリンクの訳を評価しながらも, ここではミュラーやドイッセンの解釈に組することにした。それゆえ, *te vai mābhisamviśateti tatheti taṃ samantaṃ pariṇyaviśante* を, わたくしは「実

に、あなたたちはわたしのなかに入れ！ と（口のなかの息は言った）。よろしい、と言って、彼ら（＝神々）はあらゆる方面から彼のなかに入った」と訳した。

Tasmād yad anenānnam atti tenaitās tṛpyanty evaṃ ha vā enaṃ svā abhisamviśanti bhartā svānāṃ śreṣṭhaḥ pura etā bhavaty annādo 'dhipatir ya evaṃ veda——この文章は、文法的には特に問題はない。この文章に関して特に注目には値するのは、*ya evaṃ veda* という慣用句であろう。われわれのウパニシャッドの I, 3, 7 において、われわれは *bhavaty ātmanā parā 'sya dviśan bhrāṭṛvyo bhavati ya evaṃ veda* という形をすでに知っている。I, 3, 9 においては、*dūraṃ ha vā asmān mṛtyur bhavati ya evaṃ veda* という形が見いだされる。I, 3, 16 には *evaṃ ha vā enaṃ eṣā devatā mṛtyum ativahati ya evaṃ veda* という文句がある。ウパニシャッドにおいては、知識は力であり、「このように知っている人」は自己の願望を達成することが出来ると信じられていた。このことを踏まえた上で、われわれは当該箇所を訳す必要がある。

Tasmād yad anenānnam atti tenaitās tṛpyanti——この文句を、わたくしは次のように訳した。「それゆえ、これ（＝この口のなかの息）によって人の食う食物によって、これらの神格（＝ことばなど）は満足する」と。Evaṃ ha vā enaṃ svā abhisamviśanti bhartā svānāṃ śreṣṭhaḥ pura etā bhavaty annādo 'dhipatir ya evaṃ veda——「このように知っている人——その人のなかへ、実に、自己の親族はこのようにして入る。このように知っている人は、自己の親族の扶養者であり、もっとも優れた指導者であり、食物を食べる支配者である」。Annāda をシャンカラは *anāmayāvīty arthaḥ* と注釈している。食物を食べる人は病気ではなく健康に恵まれているという思想を、われわれはここに認めることが出来よう”。

Ya u haivaṃvidam sveṣu pratipratir bubhūṣati na haivālam bhāryebhyo bhavati——この文句をわれわれは簡単に説明しよう。われわれはここでもまた *haivaṃvidam* という表現に注意を払わねばならない。シャンカラの注釈によれば、*haivaṃvidam prāṇavidam prati* と解釈される。「口のなかの息を知っている人に対して」と訳してよいであろう。Sveṣu pratipratir bubhūṣati に対して、シャンカラは *sveṣu jñātīnām madhye pratiḥ praktikūlo bubhūṣati pratispardhībhavitum icchati* と

注釈している。この注釈によって、われわれは問題の箇所を次のように訳すことが出来る——「このように（口のなかの息を）知っている人に対して自己の親族のなかで競争者になることを望む人は、自己の扶養者を満足させない」と。この文章に次のような文句が続く——*atha ya evaitam anubhavati yo vaitam anu bhāryān bubhūrṣati sa bubhūrṣati sa hai-vālaṃ bhāryebhyo bhavati*, と。ここで用いられている *atha* は *dagegen* という意味である。*Anubhū* という語は古典サンスクリットにおいては「知覚する」、「認識する」、「経験する」などという意味である。ここでは、この語をジャンカラに拠って「従う」、「従属する」などと訳したいと思う。*Bubhūrṣati* は、*Bhṛ* の希求法 (Desiderative) である。*Bubhūrṣati* は *bubhūṣati* とまぎらわしたが、これは *Bhū* の希求法である。当該の箇所を、わたくしは次のように訳そう——「しかるに、彼 (=口のなかの息を知っている人) に従属する人、あるいは彼に従属して扶養者を養おうとする人は、扶養者を満足させる」と。

I, 3, 18 (訳)——彼ら神々は語った、実に、およそ食物であるこのすべてをこれだけ、お前は歌うことによって自己のために獲得した。お前とともに、われわれを（お前の）この食物に関与せしめよ！、と。（これに対して、口のなかの息は言った）、実に、あなたたちはわたしのなかに入れ！、と。「よろしい」と言って、彼ら (=神々) はあらゆる方面から彼のなかに入った。それゆえ、これ (=この口のなかの息) によって人の食う食物によって、これらの神格 (=ことばなど) は満足する。このように知っている人——その人のなかへ、実に、自己の親族はこのようにして入る。このように知っている人は、自己の親族の扶養者であり、もっとも優れた指導者であり、食物を食べる支配者である。このように知っている人に対して自己の親族のなかで競争者になろうとする人は、自己の扶養者を満足させない。しかるに、彼 (=口のなかの息を知っている人) に従属する人、あるいは彼に従属して扶養者を養おうとする人は、扶養者を満足させる。

I, 3, 19——*so 'yāsya āngiraso 'ṅgānām hi rasaḥ prāṇo vā āngānām rasaḥ prāṇo hi vā āngānām rasas tasmād yasmāt kasmāc cāṅgāt*

prāṇa utkrāmati tad eva tac chuṣyaty eṣa hi vā aṅgānām rasaḥ ||

I, 3, 19 (訳)——それ（口のなかの息）はアヤースヤ・アーンギラサである。なぜなら、それは四肢の精気 (*aṅgānām rasa*) であるから。実に、四肢の精気は息である。実に、四肢の精気は息であるから。それゆえ、どんな肢体から息が去ろうと、その肢体はしなびる。なぜなら、実に、これは四肢の精気であるから。

I, 3, 20——eṣa u eva bṛhaspatir vāg vai bṛhatī tasyā eṣa patis tasmād u bṛhaspatiḥ ||

われわれはここで *bṛhaspati* という語の語源解釈に出会う。*Bṛhaspati* は *Brahmaṇaspati* の同義語である。*Bṛhatī* は 36 音節 (8+8+12+8 音節) から成る韻律の名前である。シャンカラは *vāg vai bṛhatī* に対して、*bṛhatichandaḥ ṣaṭtrimśadakṣarā* という注釈を施し、引き続き *anuṣṭup ca vāk* と言っている。*Anuṣṭubh* は 32 音節 (4×8 音節) から成る韻律の名前である。

I, 3, 20 (訳)——そして、これがまさにブリハスティ (*Bṛhaspati*) である。実にブリハティー (*bṛhatī*) はことばである。これはそれ (=ことば) の主である。そして、それゆえ、それはブリハスパティである。

I, 3, 21——eṣa u eva brahmaṇaspatir vāg vai brahma tasyā eṣa patis tasmād u brahmaṇaspatiḥ ||

シャンカラの注釈によれば、ブリハティーはリグ・ヴェーダ、ブラフマンはヤジュル・ヴェーダを意味する。

I, 3, 21 (訳)——そして、これはまさにブラフマナスパティ (*Brahmaṇaspati*) である。実に、ブラフマンはことばである。これはそれ (=ことば) の主である。そして、それゆえ、それはブラフマナスパティである。

I, 3, 22—eṣa u eva sāma vāg vai sāmāiṣa sā cāmaś ceti tat sāmnaḥ sāmatvam | yad v eva samaḥ pluṣinā samo maśakena samo nāgena sama ebhis tribhir lokaiḥ samo 'nena sarveṇa tasmād v eva sāmāśnute sāmnaḥ sāyujyaṃ salokatām ya evam etat sāma veda ||

Eṣa u eva sāma という文句は、文法的には特に問題はない。これ (eṣa) というのは、もちろん、口のなかの息を指し示すことばである。Eṣa u eva sāma を、わたくしは次のように翻訳する——「そして、これはサーマン (吟唱) にほかならない」と。サーマン (sāman) は、ウドギータの歌い手によって詠唱される。そして、この「サーマン」ということばの語源解釈がここで試みられる。Vāg vai sāmāiṣa sā cāmaś ceti tat sāmnaḥ sāmatvam. Eṣa u eva sāma という文句における sāma (sāman の主格・単数) に関連して、ここでは sā は女性形の代名詞 (主格)、および ama (これという意味の指示代名詞・主格、男性形) から構成されると語源解釈される。そしてジャンカラによれば、sā は「ことば」(vāc) を、ama は「息」(prāṇa) をあらわす。Sā と ama の二つがサーマン (sāman) を構成するという考えは、チャンドーギヤ・ウパニシャッド、I, 6, 6 にも見いだされる。ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ、I, 53, 5 には tad yat sā cāmaś ca tat sāmābhavat tat sāmnaḥ sāmatvam という文句が見いだされる。今や、われわれは vāg vai sāmāiṣa sā cāmaś ceti tat sāmnaḥ sāmatvam という文句を次のように訳そう——「実に、サーマンはことばである。これは、サー (sā) であり、またアマ (ama) である。それがサーマンのサーマンである所以である」と。

しかし、サーマンを sā+ama (=sāma) と解釈するほかに、われわれのテキストは別の解釈も提示している。すなわち、別の解釈によれば、サーマ (sāma) はサマ (sama), すなわち、「等しい」ことを意味する。われわれのテキストには次のように述べられている——yad v eva samaḥ pluṣinā samo maśakena samo nāgena sama ebhis tribhir lokaiḥ samo 'nena sarveṇa tasmād v eva sāma, と。Pluṣi が何を意味するかは明らかではない。リグ・ヴェーダ、I, 191, 1 に pluṣi という語が見いだされるが、ゲルトナーはこれを訳していない。おそらく pluṣi は昆虫の一種で

あろうが、ヴァージャサネーイ・サンヒター, 24, 29 においては, *pluṣi* は蚊や蜜蜂と並んで挙げられている。シャタパタ・ブラーフマナ, XIV, 4, 1, 24, すなわち, われわれのウパニシャッドの当該箇所においては, シャンカラは *pluṣi* を「白蟻」と注釈している。わたくしは, ここでは シャンカラの注釈に従うことにした。*Nāga* は, 普通, 蛇を意味する。しかるに, マクス・ミュラー, ドイッセン, スナール, およびベートリンク はここでは *nāga* を象と訳している。彼らの訳はシャンカラの注釈に基づいている。シャンカラは, *samo nāgena hastiśarireṇa sama* と注釈している。わたくしは当該箇所を次のように訳した——「そしてまた, それは白蟻に等しい, 蚊に等しい, 象に等しい, これらの三界に等しい, この一切に等しいので, それゆえ, それはサーマンである」, と。

いずれにせよ, サーマンのサーマンたる所以を知っている人は, 自己の願望を成就する見込みがある。われわれのテキストは次のように述べている——*aśnute sāmnaḥ sāyujyaṃ salokatāṃ ya evam etat sāma veda*, と。この文句に類似しているものの一つにタイッティリーヤ・ブラーフマナ, III, 9, 20 の文句がある。そこでは次のように記されている——*aśve-naiva medhyena prajāpateḥ sāyujyaṃ salokatāṃ āpnoti*, と。この箇所に対するサーヤナの注釈によれば, *sāyujya* は *sahaikatra vāsaḥ* であり, *salokatā* は *samānalokasvāmitvam* である。ベートリンクは *salokatā* を *Besitz seiner Stätte* と訳しているが, 彼はサーヤナの注釈を踏襲していると言えよう。シャンカラは, *ya evam etat sāma veda* という文句に関して, *ya evam etad yathoktaṃ sāma prāṇaṃ veda* と注釈している。シャンカラは *sāman* を *prāṇa* (息) と解釈している。*Aśnute sāmnaḥ sāyujyaṃ salokatāṃ ya evam etat sāma veda* を, わたくしは次のように訳した——「このようにこのサーマンを知っている人は, サーマンとの合一に達し, サーマンの世界を共にする」, と。

I, 3, 22 (訳)——そして, これはサーマンにほかならない。実に, サーマンはことばである。これはサー (*sā*) であり, またアマ (*ama*) である。それが, サーマンのサーマンである所以である。そしてまた, それは白蟻に等しい, 蚊に等しい, 象に等しい, これらの三界に等しい, この一切に等しいので, それゆえ, それはサーマンである。このようにこ

のサーマンを知っている人は、サーマンとの合一に達し、サーマンの世界を共にする。

I, 3, 23—eṣa u vā udgīthaḥ prāṇo vā ut prāṇe hidaṃ sarvama
uttabdhaṃ vāg eva gīthocca gīthā ceti sa udgīthaḥ ||

ここで、udgītha という語の語源解釈が試みられる。われわれは、この奇妙な語源解釈に耳を傾けよう。

I, 3, 23 (訳)—実に、これもまたウドギター (udgītha) である。実に、ウド (ud) は息である。なぜなら、息によってこの一切は維持されている (uttabdha) から。ギター (gīthā) はことばにはかならない。ウド (ud) とギター (gīthā) がウドギター (udgītha) という語を作る。

Uttabdham という語は、ut-tabdham というふうに分解される。この語は、Stambh という動詞の過去分詞に ud という語が前置されて複合された語である。音韻の法則によって Stambh から s が脱落して tabdha となった過去分詞の前に ud が前置される。T の直前の d は t になるので、ut-tabdham という語形をわれわれは得るのである。Ud と ut とは同一の語である。ギター (gīthā) は、ud-gītha の語源を説明するために使用される。

I, 3, 24—tad dhāpi brahmadattaś caikitāneyo rājānaṃ bhak-
ṣayann uvācāyaṃ tyasya rājā mūrdhānaṃ vipātayatād yad ito
'yāsyā āṅgirasō 'nyenodagāyad iti vācā ca hy eva sa prāṇena
codagāyad iti ||

まず最初に、tad dhāpi brahmadattaś caikitāneyo rājānaṃ bhak-
ṣayann uvāca という文句を検討しよう。ここで rājānaṃ という形が見られるが、リグ・ヴェーダ以来、rājan (王) は「ソーマ」を意味することは周知の事実に属する。チャンドーギヤ・ウパニシャッド, V, 10, 4 に

においては *eṣa somo rājā* という文句が見いだされる。アイタレーヤ・ブラーフマナ (I, 14) にも, *te somaṃ rājānam akurvan* という文句がある。シャンカラも, *rājan* を祭祀の際のソーマと注釈している。当該箇所
の訳は次の通りである——「ブラフマダッタ・チャイキターネーヤもまた、まさにソーマ王を食べながら次のように言った」、と。次いで、われわれは次の文句を検討しなければならない——*ayaṃ tyasya rājā mūrdhānam vipātayatād yad ito 'yāsya āngiraso 'nyenodagāyad iti*。Tya という指示代名詞は「あの」、「かの」という意味で使用される。しかし、ここでは *tya* をわたくしはシャンカラの注釈に従って「わたくしの」と解釈したいと思う。シャンカラによれば, *tyasya tasya mamānṛtavādino* と理解することが出来る。Ito……anyena というのは、シャンカラの注釈によれば、口のなかの息とことば以外のものによって、と解釈してよいであろう。当該箇所を、わたくしは次のように訳した——「もしもアヤースヤ・アーンギラサがこれと別の仕方で (=口のなかの息およびことばを用いなくて) ウドギータを歌ったとすれば、この (ソーマ) 王はわたしの頭を打ち落としてもよい」、と。虚偽を語れば、その人の頭は打ち落とされるという思想はウパニシャッドから初期仏教へと引き継がれた⁸⁾。ところで、人は口のなかの息およびことばによってウドギータを歌うことを要求される。それゆえ、われわれのテキストは次のように言う——*vācā ca hy eva sa prāṇena codagāyad iti*。この文句は次のように訳されよう——「なぜなら、彼はことばによって、また息によってウドギータを歌った」、と。

I, 3, 24 (訳)——ブラフマダッタ・チャイキターネーヤもまた、まさにソーマ王を食べながら次のように言った——「もしもアヤースヤ・アーンギラサがこれと別の仕方
でウドギータを歌ったとすれば、この王はわたしの頭を打ち落としてもよい」、と。

I, 3, 25——*tasya haitasya sāmno yaḥ svaṃ veda bhavati hāsya svaṃ tasya vai svara eva svaṃ tasmād ārtvijyaṃ kariṣyan vāci svaram iccheta tayā vācā svarasampannayā 'rtvijyaṃ kuryāt tasmād yajñe svaravantam didṛkṣanta eva | atho yasya svaṃ bhavati bhavati hāsya svaṃ ya evam etat sāmnaḥ svaṃ veda ||*

ここでもまた、われわれは *tasya haitasya sāmno yaḥ svam veda* という表現に出会う。ウパニシャッドにおいては、知識は決定的な意味をもっている。シャンカラは *sva* を *dhana* と注釈している。しかし、ここでは *sva* は「特性」を意味する。*Tasya haitasya sāmno yaḥ svam veda bhavati hāsyā svam* をわたくしは次のように訳した——「このサーマンの特性を知っている人——特性はその人のものになる」と。*Tasya vai svara eva svam* という文句には、特に問題はない。わたくしは、この文句を「実に、それ(＝サーマン)の特性は音の響きである」と訳した。シャンカラは *svara iti kaṇṭhagataṃ mādhyamam* と注釈し、ランガラーマースジャは *kaṇṭhadhvani* と注解している。音の美しさ、音の甘い響きを強調して、ドイッセンは *svara* を *Wohllaut* と訳している。*Tasmād ārtvijyam kariṣyan vāci svaram iccheta* という文章において特に注目に値するのは *ārtvijya* という語であろう。*Ārtvijya* は *ṛtvij* から派生した語である。*Ṛtvij* は祭祀を実行する祭司であり、16の種類に分かれている。*Ṛtvij* (祭官) は祭り主(施主)によって選ばれ、主要な祭官としてわれわれはブラフマン (*brahman*)、ホートリ (*hotṛ*)、ウドガートリ (*udgāṭṛ*)、およびアドヴァリユ (*adhvaryu*) を知っている。シャンカラによれば、*ārtvijya* は「リトヴィジの職務」を指す。この箇所におけるリトヴィジはウドガートリにほかならない。ここでは、祭官の職務を履行することはウドギータを歌うことを意味する。当該箇所を、わたくしは次のように訳した——「それゆえ、祭官の職務を履行しようとする人は、ことばにおける音の響きを求めるべきである」と。*Tayā vācā svarasampannayā 'rtvijyam kuryāt tasmād yajñe svaravantam didṛkṣanta eva* という文章をわたくしは翻訳しよう。*Tayā vācā svarasampannayā 'rtvijyam kuryāt* という文をわたくしは次のように訳した——「音の響きに富むそのことばによって、人は祭官の職務を履行すべきである」と。*Tasmād yajñe svaravantam didṛkṣanta eva* という文章において、わたくしは *didṛkṣante* という語だけを指摘するにとどめよう。この語は *Drṣ* (見る) という動詞の希求法であり、「見ることを欲する」、「見たいと思う」というくらいの意味である。シャンカラは、この語について *draṣṭum icchante* と注釈している。当該の文句を、わたくしは次のように訳した——「それゆえ、祭祀において人は音の響きに富む人を見ることを欲

する」と。Atho yasya svam bhavati という文章は独立しているけれども、翻訳する際には……didṛkṣante eva に接続させるとよい。独立した文章として翻訳する時には、「それから、その人に音の響きがある」となるけれども、……didṛkṣante eva に接続させれば、「それゆえ、祭祀において人は音の響きに富む人、それから（サーマンの）特性を所有している人を見ることを欲する」と訳してよいであろう。Bhavati hāsya svam ya evam etat sāmnaḥ svam veda—ここでもまた、われわれは *ya evam veda* という文句に出会う。この文章の意味は次の通りである——「このようにサーマンのこの特性を知っている人——特性はその人のものになる」と。

I, 3, 25 (訳)——このサーマンの特性を知っている人——特性はその人のものになる。実に、それ (=サーマン) の特性は音の響きである。それゆえ、祭官の職務を履行しようとする人は、ことばにおける音の響きを求めるべきである。音の響きに富むそのことばによって、人は祭官の職務を履行すべきである。それゆえ、祭祀において人は音の響きに富む人、それから（サーマンの）特性を所有している人を見ることを欲する。このようにサーマンのこの特性を知っている人——特性はその人のものになる。

I, 3, 26—tasya haitasya sāmno yaḥ suvarṇam veda bhavati hāsya suvarṇam tasya vai svara eva suvarṇam bhavati hāsya suvarṇam ya evam etat sāmnaḥ suvarṇam veda ||

I, 3, 26 (訳)——このサーマンの黄金を知っている人——黄金はその人のものになる。実に、それ (=サーマン) の黄金は音の響きである。このようにサーマンの黄金を知っている人——黄金はその人のものになる。

I, 3, 27—tasya haitasya sāmno yaḥ pratiṣṭhām veda prati ha tiṣṭhati tasya vai vāg eva pratiṣṭhā vāci hi khalv eṣa prāṇaḥ pratiṣṭhito gīyate 'nna ity u haika āhuḥ ||

I, 3, 27 (訳)——このサーマンの基礎を知っている人は基礎づけられている。実に、それ(=サーマン)の基礎はことばにほかならない。なぜなら、まことにこの息はことばに基礎づけられて歌われるから。しかし、「食物に(基礎づけられて)」、とある人々は言う。

I, 3, 28——*athātaḥ pavamānānām evābhyārohaḥ sa vai khalu prastotā sāma prastauti sa yatra prastuyāt tad etāni japed | asato mā sad gamaya tamaso mā jyotir gamaya mṛtyor māmṛtaṃ gamayeti sa yad āhāsato mā sad gamayeti mṛtyur vā asat sad amṛtaṃ mṛtyor māmṛtaṃ gamayāmṛtaṃ mā kurv ity evaitad āha tamaso mā jyotir gamayeti mṛtyur vai tamo jyotir amṛtaṃ mṛtyor māmṛtaṃ gamayāmṛtaṃ mā kurv ity evaited āha mṛtyor māmṛtaṃ gamayeti nātra tirohitam ivāsti | atha yānītarāṇi stotraṇi teṣv ātmane 'nnādyam āgāyet tasmād u teṣu varam vṛṇīta yaṃ kāmam kāmayeta taṃ sa eṣa evaṃvid udgātātmane vā yajamānāya vā yaṃ kāmam kāmayate taṃ āgāyati tad dhaital lokajid eva na haivālokyatāyā āśāsti ya evam etat sāma veda ||*

Athātaḥ pavamānānām evābhyārohaḥ という文章とともに、われわれのテキストは始まる。「さて、それゆえ、ハヴァーマーナという名のストトラによって(より高い位に)登ることが結果として起こる」というふうに、わたくしは上の文章を訳した。*Pavamāna* はジョーティシュトーマ祭でサーマンの吟唱者によって歌われる特別のストトラの名前である。ハヴァーマーナという名のストトラの吟唱によって(より高い地位に)登るといふ思想は、例えば、タイッティリーヤ・サンヒター、III, 2, 1, 1に見いだされる。そこには次のような文句がある——*yo vai pavamānānām anvārohān vidvān yajate 'nu pavamānān ā rohati na pavamānebhya 'va chidyate*, と。*Pavamāna* には、*bahispavamāna*, *mādhyamdinapavamāna*, および *ārbhavapavamāna* の三種類がある。マクス・ミュラーは *abhyāroha* に対する注のなかで、*The ascension is a ceremony by which the performer reaches the gods, or becomes a god. It consists in the recitation of three Yajus, and is here enjoined to*

take place when the Prastotr priest begins to sing his hymn' と言っている。ミュラーの注は、シャンカラの注釈に基づいている。

Sa vai khalu prastotā sāma prastauti sa yatra prastuyāt tad etāni japet という文句を、わたくしは次のように訳した——「実に、プラストートリ (=ウドガートリ祭官の助手) はサーマを歌い始める。彼が歌い始める時には、彼はこれら (のヤジュスの詩句) をつぶやくべきである」と。Etāni japet という文句において、etāni はマントラを指し示す。これは、シャンカラの注釈に述べられている通りである。そして、マントラをこのように繰り返すことが abhyāroha である。シャンカラは、この点に関して次のように注釈している——*asya ca japakarmanā ākhya abhyāroha iti*, と。さらに引き続いて、シャンカラは次のように言っている——*ābh-imukhyenārohaty anena japakarmanāivamvid devabhāvam ātmānam ity abhyārohaḥ*, と。プラストートリがつぶやく三つのヤジュスは、(1) *asato mā sad gamaya*, (2) *tamaso mā jyotir gamaya*, (3) *mṛtyor māmṛtaṁ gamaya* である。これら三つのヤジュスの意味は次の通りである。(1) わたしを存在していないものから存在しているものへ導け！ (2) わたしを暗黒から光明へ導け！ (3) わたしを死から不死へ導け！ (1) に関しては、「わたしを無から有へ導け！」と訳す方が文学的かもしれない⁹⁾。スナールはこの箇所を *Fais-moi aller du non-être à l'être* と訳している。しかし、*asat* および *sat* は「存在していないもの」、「存在しているもの」である。ベートリンクはこの箇所を *Führe mich aus dem Nichtseienden zum Seienden* と訳している。ドイッセンも、この箇所を *Aus dem Nichtseienden führe mich zum Seienden* と訳している。ミュラーは、*Lead me from the unreal to the real!* と訳した。ミュラーの訳は達意的であるが、原典の精神に近いと言える。

さて、上に挙げられた三つのヤジュスに関して、われわれのテキストは次のように注解している——*sa yad āhāsato mā sad gamayeti mṛtyur vā asat sad amṛtaṁ mṛtyor māmṛtaṁ gamayāmṛtaṁ mā kurv ity evaitad āha tamaso mā jyotir gamayeti mṛtyur vai tamo jyotir amṛtaṁ mṛtyor māmṛtaṁ gamayāmṛtaṁ mā kurv ity evaitad āha mṛtyor māmṛtaṁ gamayeti nātra tirohitam ivāsti*. の長い文章に関しては、特にむずかしい箇所はない。ウパニシャットの作者が言うよう

に, *nātra tirohitam ivāsti* (ここには何一つ隠されているものはない) のである。そこでは, すべては明らかである (*là tout est clair*)——このようにスナールは訳した。Sa yad āhāsato mā sad gamayeti mṛtyur vā asat sad amṛtaṃ mṛtyor māmṛtaṃ gamayāmṛtaṃ mā kurv ity evaitad āha——「わたしを存在していないものから存在しているものへ導け! と彼が言う時には, 実に, 存在していないものは死であり, 存在しているものは不死である。わたしを死から不死へ導け! と言う時には, わたしを不死にせよ! とこのように彼は言うのである」。Tamaso mā jyotir gamayeti mṛtyur vai tamo jyotir amṛtaṃ mṛtyor māmṛtaṃ gamayāmṛtaṃ mā kurv ity evaitad āha mṛtyor māmṛtaṃ gamayeti nātra tirohitam ivāsti——「わたしを暗黒から光明へ導け! と彼が言う時には, 実に, 暗黒は死であり, 光明は不死である。それゆえ, わたしを死から不死へ導け! わたしを不死にせよ! とこのように彼は言うのである。わたしを死から不死へ導け! という時, ここには何一つ隠されているものは存在しない」と。

インド思想史において有名なこれら三つのヤジュスは, 結局, 不死への希望の言明である¹⁰⁾。このことを, われわれは心に銘記しなければならない。*Amṛtaṃ mā kuru*——わたしを不死にせよ!——これが, ウパニシャッドの中心思想である。死からの解放がウパニシャッドの Leitmotiv である。われわれのテキストは, たった今述べられたストートラ以外のものに言及する——*atha yānītarāṇi stotrāṇi teṣv ātmane 'nnādyam āgāyet*. 三つの *pavamāna* において, ウドガートリ祭官は三つのヤジュスによって祭り主 (= 施主) のためにウドギータを吟唱しなければならない。しかし, これらの三つの *pavamāna* と異なった *ājya* (溶かしバター) などの儀式に関する新しいストートラにおいて, 彼は自己のためにウドギータを吟唱すべきである。このことを考慮して, わたくしは当該箇所を次のように訳した——「それから, ほかのストートラに関して, それらを歌うことによって彼は自己のために食物を獲得すべきである」と。Tasmād u teṣu varam vṛṇīta yaṃ kāmam kāmayeta taṃ sa eṣa evamvid udgātātmane vā yajamānāya vā yaṃ kāmam kāmayate tam āgāyati——この文章を, わたくしは次のように訳した——「それゆえ, それら (パヴァーマーナと異なったストートラ) において, 彼は願い事を望むべき

であり、如何なる願望を望むことが出来る。このように知っているこのウ
ドガートリ祭官は、自己のため、あるいは祭り主のために、彼が望む如何
なる願望も、歌うことによって獲得する」と。ここでもまた、 *evamvid*
という形が見いだされる。*Evamvid* は、*ya evam vid* という熟語と同じ
く、願望成就と直結している。*Āgāyat* という語に関して、シャンカラは
この箇所 *āgānena sādhayati* と注釈している。

「このように知っている人」が自己の願望を成就することは、ウパニ
シャッドにおける特徴の一つである。われわれのテキストは次の文句を
もって終わっている——*tad dhaital lokajid eva na haivālokyatāyā*
āsāsti ya evam etat sāma veda. この文章において言語的に注目し
るのは *alokyatā* という語であろう。この語は、*a-lokya-tā* と分解するこ
とが出来。しかも、この語の直前には *loka-jit* という語がある。ウパニ
シャッドにおいて *loka* がどんな観念をあらわすかは、今後の研究テーマ
の一つであろう。ジャイミニヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ, III,
20, 10 にも、*loka-jit* という語形がある。そこでは、「*loka-jit* は世界を征
服している」という意味である。ウパニシャッドのこの箇所においても同
じである。しかし、*a-lokya-tā* は何を意味するのであろうか？ ベートリ
ンクの *Sanskrit-Wörterhuch in kürzerer Fassung* によれば、*alokyatā*
は *Verlust der anderen Welt* である。*Alokyatā* はこのウパニシャッ
ドのこの箇所では使用されていないから、正確な意味を把握することは
困難である。しかし、ジャイミニヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ,
II, 12, 8 には *tasmād u haivam vidvān naivā 'grhatāyai bibhīyān*
nālo-katāyai という形が見られる。そして、この文句の直後に「これら
の神格はあの世において世界を与えるであろう」という文章が続く。ジャ
イミニヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナのこの箇所において「世界の
ない状態」(*a-lokatā*) という際の「世界」は「あの世」を意味する。わ
れわれのウパニシャッドのこの箇所における *a-lokya-tā* は *a-lokatā* と
語形が酷似し、ベートリンクの考えたように「あの世の喪失」と訳してい
いであろう。*Loka-jit* は、「世界を征服している」、あるいは「世界の征服
者」を意味するが、この場合の「世界」は「あの世」を意味すると推定す
ることは決して間違いではない。ベートリンクは *loka* を *eine Stätte* と
訳しているが、ドイッセンはそれを *die Himmelswelt* と解説した。わた

くしは tad dhaital lokajid eva na haivālokyatāyā āśāsti ya evam etat sāma veda という文句を次のように訳した——「このようにサーマンを知っている人は、まさに世界の征服者であり、あの世を喪失する恐れはない」と。

I, 3, 28 (訳)——さて、それゆえ、ハヴァーマーナという名のストートラによって（より高い地位に）登ることが結果として起こる。実に、（ウドガートリ祭官の助手である）プラストートリは、サーマンを歌い始める。彼が（ストートラを）歌い始める時には、彼はこれら（三つのヤジュスの詩句）をつぶやくべきである——

わたしを存在しているものから存在していないものへ導け！

わたしを暗黒から光明へ導け！

わたしを死から不死へ導け！

わたしを存在していないものから存在しているものへ導け！ と彼が言う時には、実に、存在していないものは死であり、存在しているものは不死である。わたしを死から不死へ導け！ という時には、わたしを不死にせよ！ とこのように彼は言う。わたしを暗黒から光明へ導け！ と彼が言う時には、実に、暗黒は死であり、光明は不死である。それゆえ、わたしを死から不死へ導け！ わたしを不死にせよ！ とこのように彼は言う。わたしを死から不死へ導け！ という時、ここには何一つ隠されているものは存在しない。それゆえ、それら（ハヴァーマーナと異なったストートラ）において、彼は願い事を望むべきであり、如何なる願望を望むことも出来る。このように知っているこのウドガートリ祭官は、自己のため、あるいは祭り主のために、彼の望む如何なる願望も、歌うことによって獲得する。このようにサーマン（が息であること）を知っている人は、まさに世界の征服者であり、あの世を喪失する恐れはない¹¹⁾。

要 約

I, 3, 1—21. ここでは神々と鬼神たちの争いにおいて「口のなかの息」がウドギータとして鬼神たちを破滅させることが述べられている。人間の感覚器官の機能はすべて悪によって貫かれているけれども、口のなかの息だけは悪によって貫かれず、死を超えて存続している。I, 3, 1—7 において、われわれは口のなかの息がウドギータとして悪・死を滅する呪術性もっていることを知っている。I, 3, 8—21 において、われわれはウドギータとしての口のなかの息が死を超えていることを確認することが出来る。口のなかの息、あるいは生氣は、アートマンの先駆思想である。そして、この生氣がウドギータであることを知る人は食物を食うようになると言われる。*Ya evam veda* (このように知っている人) は悪、すなわち、死を征服するという思想が当該箇所テーマである。

I, 3, 22—28. ここでは、サーマン (=ウドギータ) は生氣として讚美されている。ここでもまた、サーマンを生氣であると知っている人は願望を成就することが出来る。ウパニシャッドの特徴の一つは、知識は力であるという思想である。しかし、それと並んで重要なことは、不死への希望¹²⁾が認められることである。I, 3, 28 において、われわれは「わたしを死から不死へ導け！」という祈りがウパニシャッドの中心思想であることを認めなければならない。「わたしを不死にせよ！」(*amṛtaṃ mā kuru*) という祈りこそ、まさにウパニシャッドの理想である。

〔注〕

- 1) ターンデヤ・ブラーフマナ, XVIII, 1, 2 には *devās ca vā asusās ca prajāpater dvayāḥ putrā āsams te 'surā bhūyāṃso baliyāṃsa āsan kanīyāṃso devās te devāḥ prajāpatim upādhāvan sa etam upahavyam apaśyat ||* と述べられている。ターンデヤ・ブラーフマナのこの箇所に関する限り、われわれは「神々と鬼神とはブラジャーパティの2種類の子孫であった」と訳すことが出来る。しかし、ジャイミニヤ・ブラーフマナ, II, 150 には次のように述べられている——*dvayā u ha vā agre prajāpatyā āsur devās caivāsurās ca,* と。この場合には、「最初、ブラジャーパティの2種類の子孫、すなわち、神々と鬼神が存在した」と訳してよいであろう。
- 2) 注 1) のターンデヤ・ブラーフマナのテキストによれば、鬼神は *bhūyāṃso*

baliyāṃsa であるのに対し、神々は kaniyāṃso である。つまり、bhūyas に対応するのは kaniyas であるから、ここでは kaniyas は「より数の少ない」という意味で使用されていることは明らかである。カーランドも *Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa* (=ターンデヤ・ブラーフマナ) の英訳において、kaniyāṃso devās を、the Gods were less (in number and strength) と訳している (p. 472)。

- 3) シャンカラは bhogaḥ phalam と注釈している。ここでは、bboga は果実、結果、あるいは果報を意味する。しかし、シャンカラの注釈は言語的にはあまり価値がない。
- 4) ことば、息、眼、耳、および心 (manas) の五官は鬼神の悪によって汚され、それらの本来的な善は悪によって貫かれたのである。オットー・シュトラウスは、彼の論文 *Udgīthavidyā* のなかで「ただ主要な息だけがすべての悪に対して安全である」(p. 246) と言っている。神々と鬼神の争いにおいて目標とみなされるのは、死を避けることである。人間の五官の機能は死を免れないけれども、口のなかの息、すなわち、生气は死から解放されている。この点については、シュトラウスの *Udgīthavidyā*, p. 245 参照。
- 5) *Udgīthavidyā*, p. 247 参照。悪と死からの解放、あるいは、より正確に言えば、悪としての死の回避がこの箇所の趣旨である。
- 6) シャンカラは、アートマンに関して yathoktaṃ prāṇam ātmatvena pratipadyate と注釈している。シャンカラも、すでに論じられた息をアートマンとして理解している。そして、すでに論じられた息というのは、口のなかの息・生气のことである。
- 7) このように知っている人は食物を食べる支配者である、という考え方は興味深い。ウパニシャッドにおいては、食物は非常に重要である。比喩的には、それは蜜 (madhu) と称せられる (ブリハッド・アーラニヤ・ウパニシャッド, II, 5, 1 以下)。
- 8) 初期仏教聖典スッタ・ニパータ, 983 は tuyhaṃ muddhā phalatu sattadhā という文句がある。「お前の頭は七重に裂けよ！」という意味である。スッタ・ニパータ, 987 にも同じような文句がある——muddhani muddhapāte vā nāṇaṃ tassa na vijjati。
- 9) ヒューストン・スミスは *Philosophy East and West*, Volume XXX, No. 4, 1980 のなかで Western and comparative perspectives on truth というエッセイを書き、そのなかで極めて示唆的なことを言っている。スミスはサンスクリットの *sat*, 英語の being あるいは existence に対応する語として中国語の *yu* (有) を挙げている。スミスによれば、*yu* は基本的に「もつこと」、あるいは「所有すること」を意味する。所有は、もちろん、所有者を含蓄する。それゆえ、*yu* という語は a personal flavor を支える——スミスは、おおよそこのように論じている (前掲エッセイ, p. 428)。わたくしはヒューストン・スミスのこの考えを受け入れ、サンスクリットの *sat* を有と訳すことを一貫して拒否した。「有」は「有する」という意味を含蓄し、当然、「有するもの・所有者」を示唆するからである。わたくしが *sat* を「存在しているもの」と訳したのは、このような理由ゆえである。スミスは真理に関して次のような眺望を試みている——If we confine ourselves to the

three civilizations that are being considered in this symposium—East Asia (China and Japan), South Asia (India) and the West—we can risk the generalization that more than did either of the other two, India tied truth to things, East Asia to persons, and the West to statements (前掲エッセイ, p. 427)。

- 10) 不死を約束された人は、安全を保障されるので、心の平安を獲得する。*Promise of safety* があって始めて、人は「恐れのない状態」(abhaya) に到達することが出来る。
- 11) Tad dhaital lokajid eva na haivālokyatāyā āśāsti ya evam etat sāma veda という文句を、わたくしは「このようにサーマンを知っている人は、まさに世界の征服者であり、あの世を喪失する恐れはない」と訳した。「あの世を喪失する恐れはない」というのは意識である。Āśā には、恐れという意味はない。Āśā は「希望」を意味する。ジャンカラは āśā āśamsanam prārthanam naivāsti ha と注釈している。Āśamsana は期待、希望を意味し、prārthana は望み、願望という意味である。われわれのテキストに関する限り、「あの世が喪失するという予想は存在しない」というのが比較的忠実な訳であろう。
- 12) 不死への希望は決して身体の崩壊後のアートマン（真実の自己）の存続を意味しない。キリスト教におけるような不死への希望は、ウパニシャッドには存在しない。ウパニシャッド的な不死については、別の機会に論じるつもりである。